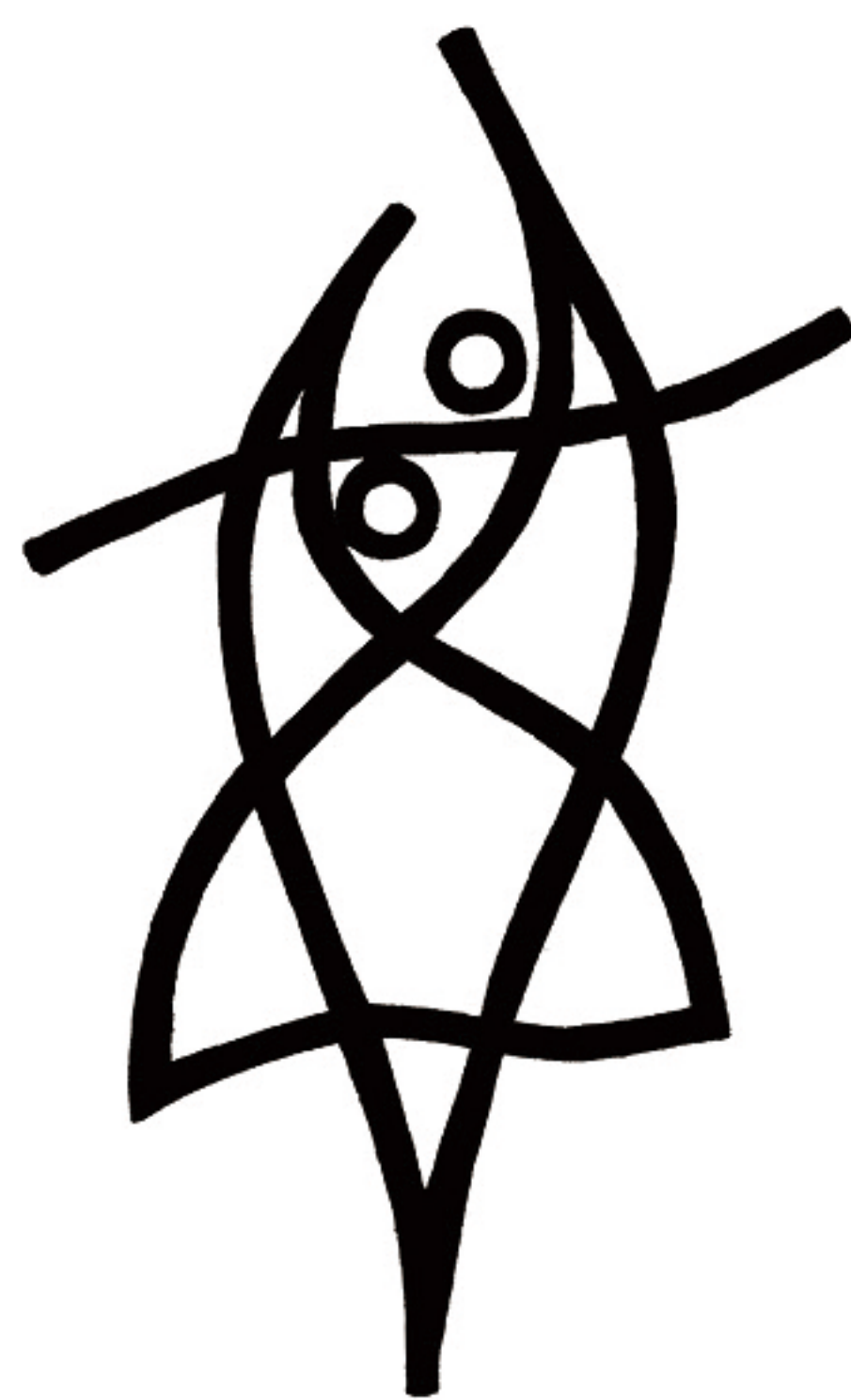


News

SAITAMA DANCE ASSOCIATION



No. 61

一般社団法人
埼玉県舞踊協会
ニュース第 61 号
2026.4.25



ごあいさつ

(一社) 埼玉県舞踊協会 会長 上原尚美

若草の香る季節になりました今日この頃、舞台活動が活発に開催されていると存じます。

埼玉県舞踊協会は発足から 57 年になり、令和 6 年 2 月 1 日より一般社団法人となりました。

令和 8 年 1 月 18 日に開催いたしましたダンスセッションは、アシュリー・ロボ氏、松崎えり氏の素晴らしい 2 作品と、コンクール 1 位作品の高水準の作品に恵まれ満席となりまして、おかげさまで盛会のうちに幕を降ろしました。お客様・担当者・スタッフの皆様へ深く感謝申し上げます。

3 月 1 日の第 58 回バレエ・モダンダンスフェスティバルも、各団体の素敵な作品が上演され、子ども達が頑張っている姿を微笑ましく拝見しました。またコンクール上位の方々にも遠方よりご参加いただきました。たくさんのお客様に見守られ、心温まる公演となりました。出品していただいた先生方、担当者、スタッフの皆様、本当にありがとうございました。

令和 8 年度は、6 月にステージ 1、7～8 月に第 58 回埼玉全国舞踊コンクールを開催する予定です。皆様のご来場・ご参加を心よりお待ちしております。

P.2 ダンスセッション 2026

P.6 第 58 回バレエ・モダンダンスフェスティバル

P.8 埼玉県文化振興の集い / 感謝状贈呈式

「浦しま子と海の友達」開催報告

協会からのお知らせ / お問い合わせ / 編集後記

発行所 一般社団法人埼玉県舞踊協会

発行者 上原 尚美

〒 330-0056

埼玉県さいたま市浦和区東仲町 1-16 鳥昇ビル 3 階

TEL 048-882-7530 FAX 048-882-7549

Dance Session 2026

2026 年 1 月 18 日（日）彩の国さいたま芸術劇場大ホール

昼の部 13:00 開演／夜の部 17:00 開演

主催：一般社団法人埼玉県舞踊協会

提携：公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団（彩の国さいたま芸術劇場）

◇新作初演 アシュリー・ロボ「Void」

◇不思議の国のアリス 松崎すみ子 松崎えり

◇埼玉全国舞踊コンクール第 56・57 回創作舞踊部門第 1 位作品

第 56 回モダンダンス部門成人の部第 1 位作品



ダンス評論家 上野房子

この度は『Void』評の評者にご指名いただき、恐悦至極です。

映像を拝見しながら、プログラムを読み返しながら、今一度、魂が揺すぶられました。

貴協会が物凄い作品を制作され、その公演に立ち会えたことは、幸運でした。

魂が揺すぶられるような作品だった。

アシュリー・ロボの振付による『Void』。埼玉県舞踊協会の「ダンスセッション 2026」（2026 年 1 月 18 日、彩の国さいたま芸術劇場大ホール）で世界初演された作品である。

ロボの名前をこれまで目にしたことはなかった。彼のプロフィールは公演チラシとプログラムに掲載されていたが、ロボが起用された経緯や新作の具体的な内容は記されていなかった。作品タイトルにもなっている〈void〉、すなわち〈空白〉の状態で、私は公演に臨んだ。

幕が上がると、木をリズムカルに叩くような音が響き、横一列に並んだ 10 数人の男女が、ステージ奥からゆっくりと手前に歩み出る。と、彼らは次々に自分の名前と年齢を叫んでは、フロアに崩れ落ちる。ある者は 5 歳、あるものは 24 歳、ある者は 37 歳、ある者は 19 歳。名前も年齢も様々だが、共通しているのは、いずれも「だった」と過去形で自身を語っていること。彼らがふたたび立ち上がり、うごめき始めた時、この者たちが生者ではないことに気付かされた。眼前の情景は、彼らが生きるはずだったのに失われた時間、すなわち〈void = 空白〉なのだった。

なぜ、彼らが生きるはずだった時間は〈void〉になってしまったのか？

答えは直ぐに明かされた。1971 年にリリースされたフォークソング「戦争を知らない子どもたち」（作詞：北山修、作曲：杉田二郎）が流れてきたのだ。折しもベトナム戦争のさなかだった当時、あえて「戦争が終わって」「戦争を知らずに僕らは育った」といった歌詞を通して、逆説的に、反戦への意識を呼び起こす歌である。

ダンサーたちは緩慢に動き、力強く駆け回り、唐突に動きを止める。彼らが生者であるから行える、生きることの発露とも換言できるダンスという行為が、死者のそれに見えてくる。さらには、この歌をリアルタイムでは知らないだろうダンサーたちの若々しく躍動する肉体を通して、戦禍により生者としての時間を断ち切られた無数の命に思いを馳せずにはいられなかった。生と死は、表裏一体に連なっているのだ。

戦争― 定義によっては武力紛争・軍事侵攻とも呼ばれる― がいまだ過去のものではないことは、動かしがたい事実である。報道や SNS を通してとはいえ、私自身、戦争を体感せずにはいられない時代のさなかにいることを痛感させられた。

アシュリー・ロボの振付は、戦争や死を直裁に描くことはない。しかし作品全体が緻密に構成されているため、失われた〈void〉の重みがずっしりと伝わってくる。

まず、作品全体の外枠を形作るのが、随所で流される、逆説的あるいは多義的な歌詞を持つ楽曲だ。所々で繰り返される「戦争と知らない子供たち」の歌詞と曲調は穏やかで、のどかでさえある。第二次世界大戦終戦直後の大ヒット曲「リンゴの歌」もわずかに聞こえてきた。私自身はこの歌をリアルタイムで知る世代ではないものの、戦後の解放感を歌いつつ、「リンゴはなんにも いわないけれど リンゴの気持ちは よくわかる」という一節が、戦争中に市井の人々が味わった悲慘な気持ちを暗示していることは聞きかじっている。

インドに生まれ、シドニーでモダンダンスを学んだロボが、よくぞ、この 2 曲を突き当てたものだ。

言葉の使い方もまた効果的だった。名前や年齢を語る自己紹介風の言葉に加えて、一人の男性が「オレンジ、イエロー、紫の光の中にいた皆が火傷を負った」と語る場面が設けられている。本作で用いられた数少ない具象的な言葉が、広島と長崎に投下された原爆を示唆していることは、指摘するまでもないだろう。

これらの音楽と言葉によって、眼前の舞台はベトナム戦争の時代から現代に切り替わったかと思うと、瞬時に、時代は第二次世界大戦時に巻き戻される。加えて、戦争が特定の場所だけで起きるものではなく、国境を越えた普遍的なものであることをも体感させ、見る者を傍観者ではなく当事者として作品に引き込んでいく。

このように周到に整えられた枠組みの中で、生者なのか死者なのか判然としなくなったダンサーが踊ることにより、彼らの動きからさまざまな意味が浮かび上がる。走る、歩く、跳び上がる、倒れる、起き上がる、静止する。頭上を見上げ、手を差し伸べる。もがくように、全身を捻る。誰かに寄りかかる、すがりつく。誰かと押し合う、引き合う。一見すると単純な動きが多義的なものになり、デュエットは対話にも対立にも見え、リズムカルに動き続ける姿は、他者を煽動しているようにも、他者に煽動されているようにも受け止められる。ロボ振付は個々の動きの意味合いを一義的に定めず、見る者に考える余地を与えるのだ。

もう一つ強烈な印象を残したのは、冒頭で名前と年齢を名乗った個々のダンサーが、しばしば匿名の存在になってしまうことだ。左右から現れた二つの集団が交差した後、舞台中央に数人だけが残される。ふたたび左右から二つの集団が現れて交差すると、その数人は集団に吸い込まれ、また別の数人が中央に残る。時に彼らはうつむき、激しく全身を突き動かす。とりわけ胴体の動きは立体的で、現代舞踊作品や舞踊コンクール類の出品作ではめったに見られないほどに激しく振り動かされ、顔の表情が分からないことすらあった。

これらの〈個〉たちは、いつでも交換可能な匿名の存在なのか。それとも〈個〉を備えた人々が集団を構成しているのか。ロボは、いま一度、見る者に問いを投げかけた。

そして最後に全員が中央に集まり、散らばり、倒れる。一人、中央に取り残された女性が天を仰ぐ。彼女の目には何が映っているのだろうか。明るい未来を目にしていることを願いたいが、やはりロボは答えを明示しない。それゆえ、逆説的に、「戦争が終わって」「戦争を知らずに僕らは育った」と断言できない時代であることを意識させることになる。

答えを示す代わりに、見る者に今と過去を俯瞰させ、思索を促す――。
ダンスという表現の根幹をなす生身の肉体が持つ圧倒的な力と、その力を存分に引き出したアシュリー・ロボの手腕に、魂を揺さぶられた次第である。

追記 『Void』が初演された1月18日以降、いったい幾つの戦争、武力紛争、軍事侵攻が新たに勃発し、幾つの〈void〉が生み落とされたのか。これから先、幾つの〈void〉が生み出されることになるのか。公演プログラムのページをめくりながら、心が揺れた。

地雷を踏む恐怖を感じることなく劇場に向かい、ミサイルやドローンに攻撃される恐怖を感じることなく公演を鑑賞できる。そんな生活の尊さと世界の脆さを、あらためて思い知らされている。

重要な作品の継承と再演 うらわまこと

埼玉県舞踊協会が彩の国さいたま芸術劇場と提携し、埼玉県が後援して開催された「ダンスセッション2026」は、バレエ、モダンの名作、創作とともに、協会が主催する舞踊コンクールの上位入賞曲を披露するという興味あるもの。

今回は、コンクールの各部門1位作品3曲と、松崎すみ子・松崎えり振付の『不思議の国のアリス』に、インドを本拠に国際的に活動しているアシュリー・ロボを招いての新作『Void』が上演された。

本稿ではコンクール作品と『アリス』を取り上げる。
コンクール作品は、創作舞踊部門の最近2024、2025年の各1位、そしてモダンダンス部門成人の部24年1位作品。このように多くの観客の前であらためて踊ることができるのは、作者、出演者にとって大変励みになることと思う。

創作の2024年1位は、振付の嶋澤のどかと近藤みどりによる、日常のちょっとした心の動きと2人の関係を若い感性で表現した『それでも月曜日はやってくる』。25年1位宗宮悠子の『My sea』は、多くのダンサーを重層的に動かし、海への愛とその神秘さを大きなスケールで描いたもの。モダンダンスの荒澤来瞳は自作の『悲しみの樹』で、柔軟、かつダイナミックな動きと繊細な表現で、音楽のアヴェ・マリアによって自分の世界を現出した。

『不思議の国のアリス』は、バレエ団ピッコロを主宰、文化庁芸術祭賞受賞など多くの優れた作品を発表した松崎すみ子の1972年作品。ルイス・キャロルの有名な童話を彼女独特のしゃれたアイデアを織り込んで楽しい作品に作り上げ、上演を重ねている。彼女が亡くなった後も、その息女でコンテンポラリー分野で振付など広く活躍している松崎えりがこれを引継ぎ、今回も新たな工夫も加えて上演したもの。このように優れた作品を作者亡き後にも遺し、上演を続けていくことは極めて重要な仕事である。

アリス（安江優）は眠りのなかでうさぎ（栗原柊）に導かれて楽しく奇想天外な冒険を重ねる。アリスが（林玲奈）小さくなるのを照明でみせ、そして花やむしたちなどいろいろな世界を訪ね、ティー・パーティーにも出席、それぞれと交流、さらにクライマックスはトランプ王国での大冒険。ハートの女王と王（今泉綸乙音、小原孝司）を中心に、すべてのカードが集結して大混戦。ようやくそこから逃れて夢の旅を終えるまで、ベテランから新進、ジュニアまで多くの出演者はみな良く踊り、演じて、だれもが楽しめる見応えある舞台となっていた。



振付作品「Void」について ― 日本での創作経験 アシュリー・ロボ

私は幸運にも、日本の埼玉のファウンデーションに招かれ、約1か月間ダンサーたちと共に創作活動を行う機会を得ました。このプロジェクトでは、協会に所属する約32名のダンサーと共に、50分の作品「Void」を創作しました。本作品は2026年1月18日に初演されました。

日本でダンサーたちと共に創作した経験、とりわけ埼玉の協会のダンサーたちとの時間は、私にとって大きな発見であり、同時に多くの学びをもたらすものでした。私はこれまで世界各地でゲスト振付家として活動してきましたが、異なる文化を持つダンサーたちと出会い、それぞれのダンスの捉え方や実践の仕方に触れることは、常に貴重な学びの機会となっています。

日本での経験の中で特に印象的だったのは、文化の中に存在する興味深い「対照性」でした。そこには、あらゆる行動の中に昔ながらの敬意や品格が息づいており、それは人々の姿勢や振る舞いにも表れていました。

リハーサル後にダンサーたちがスタジオを掃除している姿を目にしたとき、私はインドの古い伝統的な習慣を思い出しました。残念ながら現在のインドでは、その精神は理念としては残っているものの、日常の習慣として実践されることは少なくなっています。だからこそ、日本でその姿このような小さな行為の中には、尊敬、謙虚さ、そして感謝といった、若いダンサーの成長にとって非常に大切な価値観が表れています。それを実際に目の当たりにできたことは、私にとって非常に印象深い出来事でした。

また、私を迎えてくださったNaomi先生とKinuko先生は、温かく寛大で、常に心のこもったおもてなしをしてくれました。お二人のおかげで、私は日本にいながらもまるで自分の家にいるかのように安心して創作に集中することができました。

その一方で、創作の現場における組織力と正確さは非常に高く、極めてプロフェッショナルであり、時には未来的とさえ感じられるほどでした。ダンサーたちは、自分たちの仕事に強い誇りを持っており、私が提示したアイデアやコンセプトを、私がスタジオを離れた後も自発的に研究し、翌日にはより豊かで発展した形で提示してくれました。

言葉の違いは最初のうちは課題でしたが、ダンスそのもののエネルギーがその壁を越えていきました。数日が経つ頃には、テクノロジーと身体を実際に見ることは、新鮮であり、同時に深く心を打たれる経験でした。

表現の両方を通して、互いに理解し合う方法を見つけることができました。

日本でのこの経験は、私にとって非常に実り多いものであり、才能あるダンサーたちと共に創作できたことを心から嬉しく思っています。

Choreography Japan.

I had the great fortune to be invited for a month to work with the dancers of the Saitama foundation Japan.

The project included the creation of a 50 minute piece called “ Void” with about 32 dancers from the association. The piece premiered on the 18Jan 2026. My experience working with the dancers in Japan and specifically the dancers from the Saitama association was both a revelation and a learning. Generally everywhere in the world I go as a guest choreographer it’s a learning experience because I am interacting with dancers from a different culture and a different idea of how dance is observed and practiced. But with Japan and my experience with those involved with the Saitama foundation what struck me the most about the culture is the interesting existence of opposites . There is such a huge old school respect and dignity about everything that is done and one sees that in the people. I had the good fortune to witness the dancers cleaning the studio post rehearsal and that reminded me of the ancient Indian practice of doing the same thing. Unfortunately though we in India know it in theory it’s no longer a common practice in India and that was why seeing it in practice in Japan was both refreshing and humbling . These kind of small things speak of an attitude of respect humility and gratitude all so important in a young dancers life and so it was refreshing to watch it live. My hosts at the foundation Naomi sensei and Kinuko sensei were hospitable, warm and very gracious and always went out of their way to make me feel at home. On the other side the organisation and precision when working was super professional, bordering on futuristic. I also noticed the dancers pride in doing a great job. If I shared a thought or an idea the dancers worked on it long after I left the studio and brought it back the next day richer, expanded in concept and physical realisation. In the beginning Spoken language was a challenge, but dance and energy transcended that and after a few days we found a way through technology as well as movement to communicate and understand each other. My experience in Japan was an enriching one and it was a real pleasure to work with the talented dancers over there.

一般社団法人埼玉県舞踊協会名誉会長 藤井利子

ダンスセッション担当主事 窪内絹子より日本の終戦直後の状況を知る人が少ない今、私の体験した記憶と、「Void」作品の感想を書いて欲しいと依頼があり、書かせて頂きます。太平洋戦争が続く昭和 19 年 4 月、小学校二年の私は、縁故疎開で千葉の親戚に一人あずけられ、多くの児童は担任の先生と共に学童疎開をしていた。20 年に入ると、日本の空に米国の飛行機の飛来爆撃が始まり、3 月 10 日、東京の空一面真赤な火の海と化した東京大空襲の空を見つめながら、伯母が「東京は全滅だ」と云うのを聞いていた。疎開地も、水を張った田に爆弾が落ちると、10 メートル近い水柱が立ち上っていた。8 月 15 日終戦。米軍の占領政治が始まった。母は一か月後に迎えに来たが、水道がやっと復旧し電気やガスの復旧はめどがたたない。小学校も全焼したと聞く。帰京した駅から、低地の下町は見渡す限り焼け跡で家がなく、火中逃げて高台の家の方へ来た人々を、私の家でも泊めていて、家に着くと知らない人達が部屋を歩いていて驚いた。被害が少ないとはいえ、西側隣家は全焼。あちこちが歯抜け状態の焼け跡であった。同じ班で被災した学友の住居は、未だ防空壕で生活していたり、焼け跡から集めた様なトタン板で小さなひと間のバラックを作り家族全員生活していた。(豪居住者 28,000 戸と報じられたと聞く。)生きる為にはまず食料。帰京した日、20 日遅配でやっとさつま芋の配給があった。空襲が続く頃は配給も止まり、母は近距離農家へ母と姉の着物と物々交換で、わずかな米や芋を手に入れていたと聞く。終戦後は餓死者が続出。私も道端に死体がそのまま置かれていたのを見ている。(全国では今後更に増して 10,000 人の餓死者が出るだろうと報じられたと聞く。)三年生の私は、爆撃をまぬがれた遠くの小学校で、2 校の生徒が午前・午後の二部制授業と、雨の日以外は、焼け跡の校庭で、セメントの欠けらや石を拾って腰かけ勉強の遅れを取りもどす努力を続けていたが、昼は食事解散。午後青空教室集合の時も、帰宅せず校庭で過ごす昼抜き(一日二食)生活児童が 10 名位はいて、淡々と時送りをしている友がいたわしかった。21 年 2 月、預金封鎖となり、財産すべてが預金であった私の家は引き出せるのは 500 円のみで、通帳そのものが無効となり、紙くずとなった。9 月始め、学校から帰るとドーンと地響きと共に廊下のガラス戸がビリビリゆれ動き、庭に飛び出ると全身血だらけの母が倒れており、不発焼夷弾が枯れたトウモロコシの根を引き抜いた時爆発し、全身に破片を浴び、日赤に運ばれ命は助かったが長い入院が続いた。回覧板が廻り、不発弾を調べ連絡する様書かれており、私の家は物置にも 1 個あり、近所の家からも数個見つかり撤去されたが、全国でかなりの数がみつきり、ラジオでも報じられた。学校には満州等から引き揚げ帰国した児童も加わり、生徒数は増えたが、仲良しの同級生と、疎開で別れ別れになる前日、二人で同じ道を行ったり来たり別れを惜しみ、再会を約束したが、水戸で艦砲射撃で亡くなっていた事を知った。Void のダンスシーンに、友と二人の同じような情景があり、友が会いに来てくれた気がして涙があふれた。ダンスの流れの中に、一瞬醸し出す空しい終失感。内なる人間の心を、無言という言葉で、深い痛みを描く作家アシュリー・ロボの繊細で鋭い感性の素晴らしさに、深く感動いたしました。日本、埼玉での公演に御作を拝見出来ました事に、厚く感謝を申し上げます。ありがとうございました。

ダンスセッション担当理事 窪内絹子

7 年振りのダンスセッション開催となった。2 年に一度の公演も新型コロナウイルスの影響で 2 回開催することが出来ず、その間に誰をお呼びして振り付けて頂くかと、いろいろのつてを頼りながら検討し、インドのアシュリー・ロボさんをお呼びする事となりました。始めは通訳兼ダンスミストレスの方が来てくれる事になっていましたが体調を崩し来られなくなり、次のダンスミストレスはインドでビザが取れなくて日本に来られず、どの様な対応で乗り切るかと考えているうちにアシュリーさんの来日の時が来てしまいました。12 月 19 日午前 6 時半に来日という事で、上原会長とまだ暗い早朝に車を走らせてお迎えに行き空港に着いた頃、やっと夜が明けて来たという感じの中でアシュリーさんと会う事となり、ホテルにご案内させていただきました。アシュリーさんと担当者と出演者との作業が始まりました。しかしそこにアシュリーさんの舞台に出演した事のある愛智さんが助けてくださり、通訳とダンスミストレスの両役を務めてくださいました。愛智さんもご活躍している方なので彼女が来られないときは、出演者の一人が頑張って通訳してくれたり、機械で翻訳をしてくれるシステムを導入してくれたりと個人の仕事での力を発揮してくれ、協力体制が出来上がり素晴らしく機能して行きました。21 日から早速、顔合わせ振り付け始まりとなりました。そこから厳しく、きつく、素晴らしい一ヶ月を過ごす事となります。彼はクリスチャンなので 12 月 25 日は稽古をお休みにしてくれましたが、日本の暮れとお正月と新年は関係がなく、稽古を入れていました。暮れは大掃除をして一年間の埃と汚れを払い、1 月 1 日に新しい年を迎え 1 年を無事に元気に過ごせるように、皆で集まり宴を開くのだと話したら、12 月 31 日と 1

月1日の二日間はお休みにしてくれました。1月2日の稽古始めの前に日本のお正月のしきたりを経験してもらいたく、お屠蘇を飲んでいただき、おせち料理を食べてもらい、「おめでとうございます」の挨拶でこれからの一年が始まるのだという事を知ってもらい、そして1月18日まで御指導をよろしく願いいたします。と頼みますと、それには驚きと喜びがあった様で、殊のほか感激してくれました。

始めは午前9時から午後9時までの振り付けではアシュリーさんの身体が持たないと、朝は上原会長が毎日ホテルまで迎えに行き劇場までお連れして下さり、帰りは出来るだけ私の父兄にホテルまで送ってもらうという生活が続きました。そのうちに出演者が電車で一緒に乗ってくれるなどの行動が生まれ、コミュニケーションが出来ていきました。作品創りも1場面1場面話し合いと創造にあふれて、どんどん深く濃いものになっていきましたが、ある時彼はインドから用意して来た音楽にとても気を遣っていて、私に「絹子、この曲を使用して日本人は気を悪くしないだろうか」と聞いてきました。「私達は作品をお願いしたのだから何も心配しないで使いたい物を使い、作りたい様に作って欲しいそれが私達の望みだ」とアシュリーさんに答えてあげたら安心したのか、それからまた勢いがつき、夜の9時を過ぎる事も有り、何回さいたま芸術劇場に頭を下げに行ったことだったか、、、。

アシュリーさんは仏教とカトリックとヨガの精神を柔軟に扱い指導してくれました。そして、「踊りはパターンではない」とこの言葉を毎日の様に口にし、今あなたがいる場所、空間、周りの人とのつながりつながりと言い、今のパターン化した動きを否定し続けて指導してくれました。一人一人の性格や生活環境を驚くほどよく観察しとらえていました。32名のダンサーを的確に配置し、動かし、出来上がった作品が【Void】です。私はアシュリーさんとそして協会担当の先生方と暮れからお正月と一緒に過ごさせていただきました。この大切な1か月間に舞台を創り舞台に携われる者といたしまして、ありがたく貴重な時間をいただきました。そしてダンサーの一人一人とも深く関わり合うこともでき、これからどの様な未来を見せてくれるのかと思うと楽しみと期待で一杯です。

アシュリーさんはもちろんのこと、ダンサーの方も自分の仕事をしながら一ヶ月本当に大変な思いをして時間を共にしてくださいました。担当の先生方、こんなに贅沢に大練習室と舞台を使用させて下さいましたさいたま芸術劇場、そして満席にして下さいましたお客様に心より感謝と御礼を申し上げます。多くの方に時間とお金と心の負担をかける大事業のダンスセッションではございますが、埼玉県舞踊協会の先代の先生方から繋いできました思いの込めったこの事業を維持して行けます事を心より願って居ります。ありがとうございました。

「Void」 出演 工藤史皓

長年継続されているダンスセッションに初めて参加させて頂き、アシュリー・ロボ振付作品「Void」に出演をしました。以前のダンスセッションで披露された、テロ・サーリネン振付作品「Mesh」を見たときから一度参加したいと思っていたが、ようやくタイミングと時間との兼ね合いが付き、参加が実現した。

アシュリー氏は日本の現代舞踊家達へはどうするべきかを探りながらやっていると聞いていたが、実力のある海外の振付家による大人数のカンパニーへの創作プロセスを体験出来ました。これは非常に稀で、舞踊界にとって貴重な企画であると思います。

具体的には、まずは様々な流派が入り混じる舞踊家達の舞踊言語を統一する作業から行われた。創作期間が丸一日が一ヶ月とはいえ、とても短い時間でVoiceやZeroといった専用の舞踊言語を徹底的に身に染み込ませ、個人へのフォーカスの次には他者や空間に対しての舞踊言語として、協調性とさらに先を行く空間との同化を行う。これは非常に繊細で深いレベルで作業が行われた。作品においては、振付ではなく、これらの舞踊言語を習得し身から自然に表現されることを最重要視された。これらの作業の延長で作品が構成されていきました。アシュリー氏は、この繊細な作業と同化する感覚を保つためにリハーサルの部屋、或いは劇場に入った段階で空間に敬意を持って自分を存在させ取り組むべきだと説きました。大人から中学生まで様々な年齢のダンサーが参加していたが、アシュリー氏の手腕もあり纏め上げられ、一ヶ月の取組のなかで年齢を超えて徐々に全員が一つの方向へ向かって強力な一体感が生まれ、結果強度の高い作品を披露できたのではないと思う実感がありました。

私個人では、作品の中でMCのようなユニークな役割を与えられました。アシュリー氏とは考え方や感覚が私の考える一つの方向と非常に合致しており、中々ここまでの人には初めて出会いました。これは振付家或いは教育者として言語化が優れた方であったというのはあると思います。アシュリー氏から示された様々な課題や作品の意図は信頼して受け入れられ、役割に臨めました。また経験豊かなアシュリー氏により、私が模索していた方向の確かに先にある一つの考え方を示してもらえ、これは個人的に大きな収穫でした。

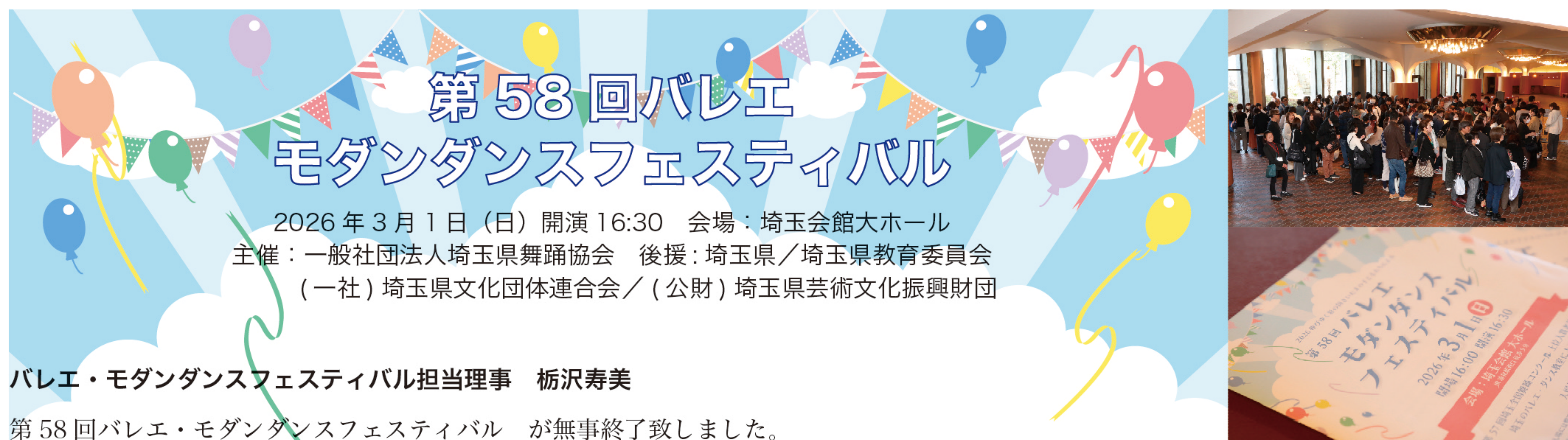
この作品を客席から見られなかったのだけは残念ですが、本企画に携われたことはとても幸運でした。幼少期からお世話になっている埼玉舞踊協会の先生方に感謝いたします。ありがとうございました。

「不思議の国のアリス」 振付 松崎えり

埼玉県舞踊協会が手がけるたくさんの意欲的な公演の中でも特に質の高い、私の好きな“ダンスセッション”今回、松崎すみ子版の「アリス」上演のお話をいただき、素晴らしい再演の機会、と本当に嬉しく思いました。オーディションではバレエ・モダン問わずお集まりいただき、年齢やジャンルを超えてたくさんのダンサーに出会う事ができました。共にクリエイションの時間を過ごし、仲間になり、今回のような温かい、ある意味新しい「アリス」を創りあげることができました。参加者の中にはお仲間のいない子、慣れない現場に戸惑う人もいました。ひとりでも消極的な子が出ないよう私なりにみんなを見て、ミストレス、協会の先生方にお力をお借りして進めました。助けてくれたのは先生方のみでなく、共演者たちでした。わからないところを教え合い、ダンス以外の話もしたりしながら仲間になって、また、励ましあい、刺激し合い、どんどんトリハーサルは良い時間になっていきました。リハーサルは良い空気でしたので小さなダンサー達にも質の向上を求めました。自分が楽しいだけではいけない、振り付けは覚えてから先がもっと大切、お客様にこの世界を楽しんでいただくために、と話し続け、その声は皆さんに届き、挑んでくれました。本番当日は多くの方がご来場くださり、喜びの声も届きました。楽屋での打ち上げの場で尚美先生や窪内先生方が喜んでくださったこと、アシュリーさんにもお褒めいただいたことなどに感激、この打ち上げの場でVoidの制作過程などを聞いた、アリス出演者何名かはVoidの本番やゲネを見られなかったことを悔やんでいました。見られなかったけれど、こうして同時上演したものを感じることが出来る時間も貴重だと感じました。未来あるダンサーたちとの時間、この貴重な機会に心から感謝いたします。

「不思議の国のアリス」 出演 アリス役 安江優

この度は公演の大成功おめでとうございます。リハーサル期間から出演者一人一人が個性を出し、役を生き、けれどみんなの気持ちは1つで温かい空気が流れていて、そんな皆さんに導かれ自然な表現をする事ができました。舞台上のエピローグで夢から覚めた時、本当に幸せな気持ちになりました。素晴らしい機会を与えてくださったえり先生、舞台裏で支えてくださった先生方、関わってくださった全ての皆さんに感謝申し上げます。ありがとうございました。



バレエ・モダンダンスフェスティバル担当理事 栃沢寿美

第58回バレエ・モダンダンスフェスティバル が無事終了致しました。

参加団体の先生方担当の先生方そしていろいろお手伝い下さった先生方お疲れ様でした、本当にありがとうございました。今回は1月・3月・6月と公演が続いたせいか(?) いつもより参加団体が少なく危惧しておりましたが、コンクール上位入賞者も全員出演出来、終わって参加の先生方より、「素晴らしい照明・大舞台で踊れて生徒や保護者の皆様にとって大きな励みとなったようです」「貴重な合同公演に参加出来大変嬉しく喜んで帰途についたようです」「生徒達にとって良い経験となり私にとっても勉強になり感謝です」等々有難くも沢山の感謝のお言葉を頂きました。こちらこそ感謝の気持ち一杯になりました。中々多くの公演に参加が難しくなっている昨今! 担当としても頭を抱える事が多々ありますが、少しでも皆様のお役に立つ事が出来たようで心から安堵致しました。58年の長きに渡って先輩の先生方が紡いで来て下さったフェスティバルを次に繋げて行けますように担当一同気持ちを新たに益々頑張る所存です。

一般社団法人埼玉県舞踊協会名誉会長 藤井利子

～第58回バレエ・モダンダンスフェスティバル～ 2026年3月1日(日) 埼玉会館 16:30～

第57回埼玉全国舞踊コンクール上位入賞披露

クラシックバレエ部門『2部』第2位の2県教育長賞 竹内杏「サタネラのVa」、第2位の1県議会議長賞 於保かなさ「アルレキナーダのVa」、第1位県知事賞・橘秋子賞・津田郁子賞・(公社)日本バレエ協会賞 浅田良舞「エスメラルダより男性Va」

『ジュニア部』第2位の2県教育長賞 衛藤朋美「オーロラ3幕のVa」、第2位の1県議会議長賞 塚本花梨「フローラの目覚めよりVa」、第1位県知事賞・橘秋子賞・津田郁子賞・(公社)日本バレエ協会賞 菊池麗「ライモンダよりVa」

モダンダンス部門『2部』第2位の2県教育長賞 金谷美空「セイレーン・盲目の人魚」、第2位の1県議会議長賞 山本彩葉「森が泣いている...」、第1位県知事賞・橘秋子賞・津田郁子賞・(一社)現代舞踊協会賞 西奥麻夏「追憶の旋律」

『ジュニア部』第2位の2県教育長賞 菊地陽日「心の波紋」、第2位の1県議会議長賞 近藤花音「その手の先に」、第1位県知事賞・橘秋子賞・津田郁子賞・(一社)現代舞踊協会賞 門脇璃子「啼けない鳥」 以上12曲を御披露頂き、素晴らしい演技を鑑賞して頂く事が出来ました。

休憩後、埼玉のバレエ・ダンス教室による熱演開始。①studioAMuse 新野舞踊研究所 ②Chika Ballet School ③中村友美・上田仁美モダンバレエ ④川名今朝美モダンバレエスタジオ ⑤腰塚なつ子バレエアトリエ ⑥マヤバレエスタジオ ⑦すゞきさよこモダンダンススタジオ ⑧705 + Dance Lab ⑨藤井・上原モダンバレエスタジオ ⑩窪内絹子&YOKO モダン・バレエスタジオ 以上の作品上演。

「春ー追憶に咲き誇れり」作品イメージをジュニアの大きい方から、幼児まで全員が一体となって速いダンステンポの転換を、流れて行く活気が見事で素敵! 「生きとし生けるものへ」大きい方が作品の芯を荷いながら小さい子供をリードしてゆく舞台空間が楽しく暖かく素敵! 「すきすきソング」ジュニアたちの恋心が嫌味なく、伝わる振付の印象が、見る人の記憶に残されて行く振付手腕が素敵! 「荒野の鳥たち」荒野で精一杯飛び、生きようとする姿性が見えて、大人になっても思い出の宝物になりそう。素敵! 「『海賊』花園よりワルツ」練習を積んで今在る姿が花園そのもの。亡き先生も喜ばれたと思います。素敵! 「王様の耳はロバ耳」民と共に楽しく生きる王様の国は、戦争の無い笑顔一杯の国かしら。素敵!

「ディズニーメドレー」子供達が夢の再現を楽しむ無心さも、時の流れも素敵! 「カーテンコール」ジュニアの大きな方々がテーマを担いながら、全員が心ひとつに高まり締め括る演出手腕が見事。素敵! 「春到来」優しい空や風、温もる土や水。春をみつけながら楽しむ子供達って素敵! 「ダンゴ虫は空を見た」ダンゴ虫の生きる場所がある地球に、心がやすらぎました。大きな視線に愛があって素敵!

皆様、来年も素敵な作品を拝見出来ます様、楽しみに致しております。担当の先生方お疲れ様でございました。直感で本番メモをさせて頂きました。



① studioAMuse 新野舞踊研究所
「春ー追憶に咲き誇れりー」



② Chika Ballet School
「生きとし生けるものへ」



③ 中村友美・上田仁美モダンバレエ
「すきすきソング」



④ 川名今朝美モダンバレエスタジオ
「荒野の鳥たち」



⑤ 腰塚なつ子バレエアトリエ
「『海賊』花園よりワルツ」



⑥ マヤバレエスタジオ
「王様の耳はロバの耳」



⑦ すゞきさよこモダンダンススタジオ
「ディズニーメドレー」



⑧ 705 + Dance Lab
「カーテンコール」



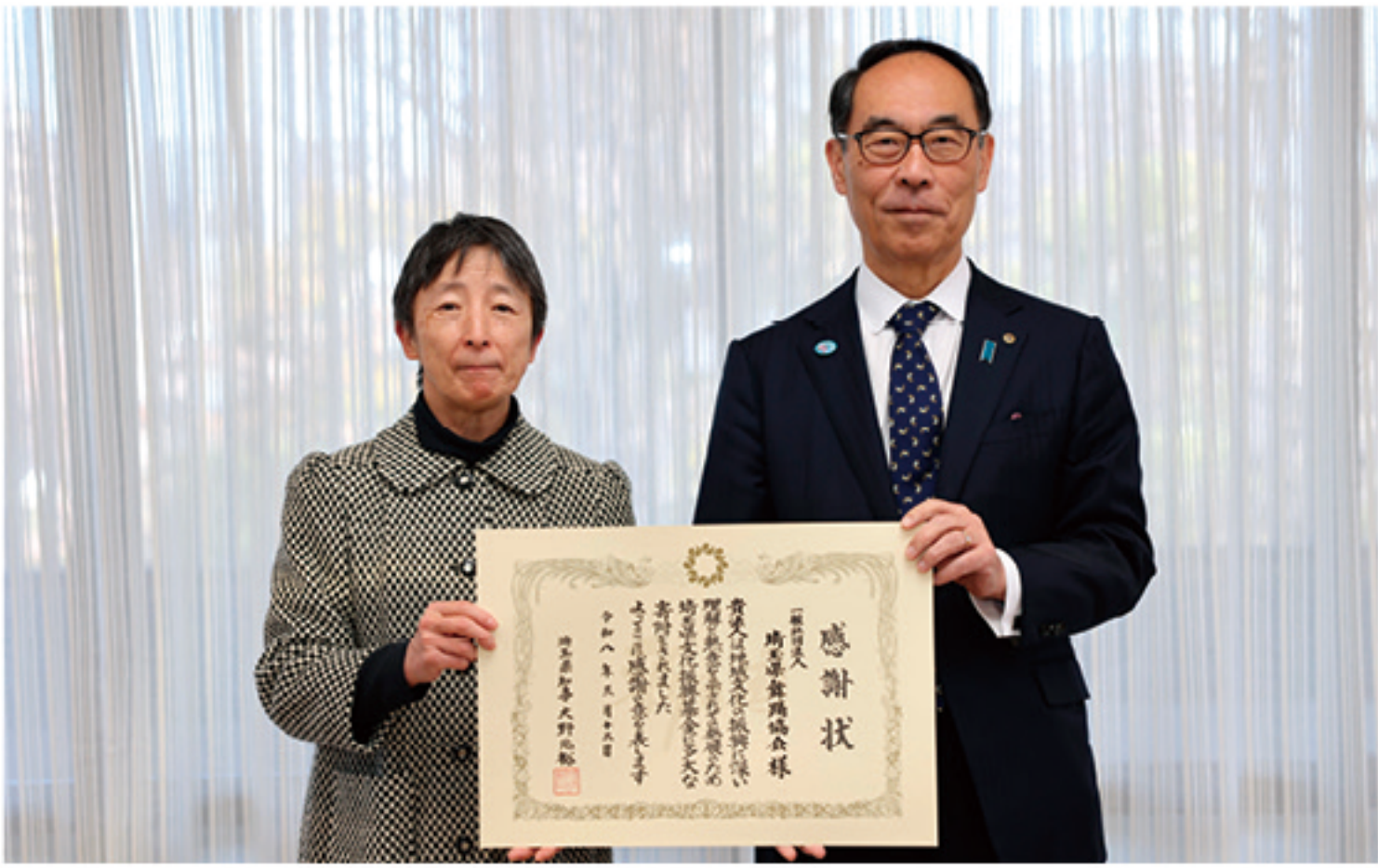
⑨ 藤井・上原モダンバレエスタジオ
「春到来」



⑩ 窪内絹子 & YOKO モダン・バレエスタジオ
「ダンゴ虫は空を見た」

令和7年度 第50回記念 埼玉県文化振興の集い

埼玉県文化団体連合会は昭和25年に発足し、昨年5月に藤井利子先生が第11代会長に就任されました。令和8年2月7日（土）埼玉会館大ホールにおいて芸能部会公演テーマ「現代と未来をつなぐ文化の道」が開催されました。埼玉県舞踊協会からは、藤井・上原舞踊研究所「春到来」、新野舞踊研究所「花咲く旅路」「春一追憶に咲き誇れり」の3作品が出演参加し、盛会の中、無事に終了いたしました。皆様のご協力に心より感謝申し上げます。



感謝状贈呈式

埼玉県舞踊協会は創立以来、埼玉県の舞踊芸術・文化の発展のために毎年、埼玉全国舞踊コンクール会場で観客の皆様からご寄付をいただき、埼玉県の文化振興基金へ寄付してきました。令和8年3月12日（木）に埼玉県知事公館にて感謝状贈呈式が行われ、上原尚美会長が出席しました。長年にわたりご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げ、ここに謹んで報告させていただきます。

コレオグラファーの目 vol.21

「浦しま子と海の友達」
開催報告

松元夢子（劇団東京乾電池所属）による待望の書下ろし脚本×コンテンポラリーダンスを宮代町コミュニティセンター進修館大ホール（＜象設計集団＞設計による、理念と特異な美を持つ会館）にて、2025年10月12日に開催されました。複数のコレオグラファーによる共作、脚本とダンスのコラボレーションという取り組み、特殊な舞台空間での上演等、沢山の初めての試みが展開され、多くの人々の知恵と発想、協力により大盛会のうちに幕を閉じました。



コレオグラファーの目実行委員会は、今回得られた気づきとエネルギーを基に、これからも新たな試みに挑戦していきたいと思います。
参加コレオグラファー：高城愛菜、佐藤優子、北野友華、金森みずほ、栗原愛心、江積志織、カワムラアツノリ・松元日奈子、文月 玲、藤井 香／映像：工藤史皓／光のオブジェ：みょうか／美術協力：江積優子／台詞指導：文月玲／児童指導：上原尚美／音響：渋谷正巳／舞台：佐藤智子／照明：上田仁美、原島マヤ／統括：すゞきさよこ、藤井香／舞台協力：青木りえ、新井玲子、北原弘子、佐藤良寛、谷乃梨絵、若野信子、高橋純一
コレオグラファーの目実行委員会：藤井香、原島マヤ、すゞきさよこ、文月玲、上田仁美、江積志織

編集後記

一般社団法人埼玉県舞踊協会ニュース第61号を発行いたします。年明けに開催された「Dance Session 2026」の公演では、マチネ・ソワレともに盛会のうちに幕を閉じることが出来ました。また、3月には「第58回バレエ・モダンダンスフェスティバル」が開催され、皆様のおかげで無事に終了いたしました。今年度も「第49回 STAGE 1」の公演やコンクール開催も控えておりますので、協会員をはじめ皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

広報部：山本教子 藤井香 弓削多淳子 矢島茜

協会からのお知らせ

歴史ある、世界に羽ばたくコンクール
第58回埼玉全国舞踊コンクール 2026
主催：（一社）埼玉県舞踊協会 協賛：埼玉県芸術文化祭 2026（申請予定）
会場：埼玉会館大ホール（JR 浦和駅より徒歩5分）

出場申込について
今年度のコンクール出場申込は
5月6日（水・祝）16:00まで
延長いたします！たくさんのダンサーをお待ちしています！

協会員からのお知らせとご案内

- 窪内絹子 & YOKO モダン・バレエスタジオ第31回生徒発表会
日時：2026年5月10日（日）15時開演（入場無料）
会場：川口リリアメインホール
連絡先：048-255-6447（窪内絹子）
- 第25回伊藤京子バレエスタジオ定期発表会
日時：2026年7月26日16時開演（入場無料）
会場：ウェスタ川越ヤオコー大ホール
連絡先：049-233-6244（伊藤京子）
- 第23回細川初枝モダンバレエ発表会
日時：2026年10月11日（日）16時開演予定（入場無料）
会場：東京都葛飾区亀有リリオホール
連絡先：studiocommu@gmail.com（細川初枝）

一般社団法人埼玉県舞踊協会

- ◇ホームページ
<https://www.saitamaken-buyoukyokai.jp>
- ◇Eメール saitama-dance@blue.ocn.ne.jp
- お知らせ
・次回第62号（2026年10月発行）の「協会員からのお知らせとご案内」への掲載は2026年11月～2027年4月のイベントが対象となります。申込締切は8月末日と致しますのでお早めに広報までお知らせください。

ホームページ



Instagram



@SAI.DANCE1967